筑波学院大学紀要第15集　175 ～ 195 ページ　2020年

＜研究ノート＞

トラベルジャーナリズム研究
～旅の書き手の役割を巡って～

稲垣　太郎*

Travel Journalism Research on the Role of Travel Writers and Journalists

Taro INAGAKI *

Abstract

What is difference of travel authors, travel writers and travel journalists in Japan ? This question is important to make clear meaning of Travel Journalism. These 3 identities are based on the role of sustaining Travel Journalism. For pursuing the answers, I interviewed 5 persons who are still active writers, so that it is cleared that travel authors are responsible for travel literature, travel writers for travel information, travel journalists for criticism on travel. Travel writers have many web jobs from sponsors. There are less opportunities of success for travel authors and journalists by lack of travel magazines and hard situation to critique.

抄　録

トラベルジャーナリズムを支える「旅行作家」、「トラベルライター」、「トラベルジャーナリスト」という旅の書き手の役割はどう異なるのか。それぞれの輪郭線を明確にするため、1960年代から現在まで、なお書き手として活躍する５氏にインタビューを行った。彼らの証言により、紀行文を担うのが旅行作家、旅行案内記を主とする旅行情報を提供するのがトラベルライター、その他もろもろの旅のコンテンツを批判・批評をもって書くのがトラベルジャーナリストであることが明らかになった。旅行雑誌の衰退により、旅行作家の活動の場は狭まっている。スポンサーに依拠するトラベルライターはWEBを中心に活躍、一部は「トラベルジャーナリスト」を名乗る。発表する側に押されて、トラベルジャーナリストは批判や批評がしにくい時代に直面している。

キーワード：トラベルジャーナリズム、トラベルジャーナリスト、トラベルライター、旅行作家、紀行文、旅行案内記、旅行雑誌

＊　筑波学院大学経営情報学部非常勤講師、Tsukuba Gakuin University

1．はじめに

「トラベルジャーナリズム」は、その名の通り、旅行に関する言論活動全般を指す。しかし、その意味や定義はあいまいと言わざるを得ない。例えば「トラベルジャーナリズム」をキーワードにしてGoogleで検索しても、筆頭に前川健一の立教大学における講義のシラバスが出てくる以外は、「トラベルジャーナリスト」を名乗る人たちのサイトしか見つからない。日本の論文を探すサイト「CiNii（NII学術情報ナビゲータ［サイニィ］）」でも、このワードを含む論文はヒットしなかった[1)]。「トラベルジャーナリスト」は実在しても、誰も「トラベルジャーナリズム」を取り上げ、論じようとしない。不可思議かつ奇妙な現状がここにある。

トラベルジャーナリズムの正確な意味を知るためには、トラベルジャーナリストの活動の実態を知る必要がある。ところが、このトラベルジャーナリストの定義もあいまいである。旅行に関する言論活動を担う書き手の呼び名としては、このほかに「旅行作家」や「トラベルライター」「トラベルレポーター」などがある。これらとの違いもまた不鮮明である。

そこで本稿では、旅の書き手として現在も活躍する方々に直接インタビューし、トラベルジャーナリズムの実像に迫ることにした。山本鉱太郎と林荘祐、沓掛博光、前川健一、橋賀秀紀の５氏（以下、敬称略）である。山本は紀行文学の復興を志した戦後を代表する旅行作家であり、林は新聞記者出身の「旅記者」である。沓掛はトラベルジャーナリズムの舞台を支えてきた旅行雑誌の編集長。前川はアジアを中心に世界の街を定点観測する書き手であり、沓掛と同じく大学でトラベルジャーナリズムを講じた。橋賀はWEBを軸に活躍、格安チケットの入手方法などのノウハウを詳細に紹介するLCC時代の申し子である。

彼らの証言を第一次資料とし、その事実関係の裏付けを踏まえつつ、我が国における旅行に関する書き手の歴史と現状を明らかにすることを目指した。この手法がトラベルジャーナリズム研究への道の第一歩につながると確信したからである。

2．インタビュー

2．1．山本鉱太郎（やまもと・こうたろう）＝2019年8月29日、千葉県流山市で

1929年、東京都生まれ。戦後を代表する旅行作家、劇作家。50年代から各地で旅や文学に関する講演を行い、本を著わし、オペラ、芝居なども執筆する。著書に『日本列島なぞふしぎ旅』全７巻、『奥の細道なぞふしぎ旅』上・下、『旧水戸街道繁盛記』、『川蒸気通運丸物語』、『秘境のいで湯』、『温泉大百科』、『東京たべあるき地図』、『新利根川図志』、『江戸川図志』上・下、『小林一茶なぞふしぎ旅』、『白樺派の文人たちと多賀沼』、『旅行案内記三百二十年』など多数。

――旅行作家を志したいきさつを教えてください。

東京・深川木場の生まれです。東京大空襲の後に群馬県足利市に疎開し、戦後もそのまま落ち着きました。桐生工専（現在の群馬大学理工学部応用化学科）に進み、その学生時代に奥利根の湯の小屋温泉を旅し、水車や紅葉、カッコーの鳴く風情に魅せられてものした作品が『小説新潮』に掲載されました。その選者だった戸塚文子さんが「面白い」と評価してくれました。日本交通公社の『旅』という旅行雑誌の編集長でした。卒業後上京し、放送作家となって、劇団四季やニッポン放送の仕事するようになりました。

『旅』で紀行文学賞の募集があり、自分の力を試そうと応募したところ、２回目に出し

た『秘湯今神温泉』という作品が入選。選者は水上勉や安岡章太郎らでした。大いに励まされ、ついに旅で身を立てることを決意したのです。1967年（昭和42年）のことでした。以来、出版社から仕事が入り、『魅惑のバス旅行』、『病気別全国療養温泉ガイド』、『全国の珍しい温泉案内』などを出版しました。これでようやく、旅の紀行文の第一人者になれたと思いました。

――当時、旅行について書くライターの社会的地位はどのようなものでしたか。

原稿料は安く、署名入りも少なく、いい待遇とは言えませんでしたね。安いところは原稿用紙400字１枚で500円。『旅行読売』が1000円。『旅』が最も待遇が良くて、3000円から5000円。しかも大きく署名を出してくれましたから、『旅』に載せることを夢見て精進しました。

われわれは「トラベルライター」と呼ばれていました。米国の呼び名で、日本ではまだ定着せず､「トラブルライターか」と揶揄され、火をつける「ライター」と間違われたこともあります。こうした状況を証明する記事が67年のアサヒグラフに載っています[2)]。私とともに中村謙、村井米子、伊能孝、毛利好彰、山本さとし（一文字：にんべん・つくりは上が「疋」、下が「月」）、加藤蕙（けい）、斎藤好江の「トラベルライター」８人が紹介されています。この記事の前書きを戸塚文子はこう書いています。

「トラベル・ライターの公式な日本語訳は、まだなさそうだ。訳語が定まらないくらい、日本では新しい稼業なのである。独立してそれで果して妻子を養えるか、疑問な段階でもある。ヨーロッパでさえ、どこかの社のおかかえか、副業か、それとも財産家の趣味の著述という例が多いときく。単独で生計が成り立つのは、アメリカくらいであろうか。自腹では、旅費がうんとかかり、その割には原稿料が安い。収支つぐないかねるというわけである……（後略）」

つまり旅の文章を書いて正業とするのは、まだ難しく、大学教員や出版社の編集者、登山家などの副業がせいぜいでした。その後ようやくドライブや温泉、釣り、ゴルフといったレジャーブームによる旅の情報への需要が高まり、トラベルライターの仕事も増えていきました。トラベルライターとは記事を発注する側がつけた呼称でした。

――当時、旅の書き手の団体はありましたか。

62年６月、私が32歳の時、旅好きの作家や編集者、詩人、画家、大学教授らで「日本旅のペンクラブ」[3)] が結成されました。宮本常一や和歌森太郎、永六輔、戸塚文子ら錚々たる著名人ばかりで、入会資格も厳しいものでした。作家仲間の玉川一郎さんの紹介で入会を許され、何年間か頑張りましたが、今一つ物足りない感じで、「旅ペン」の会員のまま、若手による別の会を作ることを考えました。

旅の情報ばかり書いていないで、読者を感動させる紀行文学を復興させようと意気込み、野口冬人、加藤蕙、飯田浩を秩父の鳩の湯に集め、会の設立を提案しました。68年６月のことです。まずは自分たちの仕事をどう呼びならわすかを話し合いました。「紀行家」「旅行家」「旅行作家」「街道作家」「紀行文学者」「紀行作家」。これらの中から「旅行作家」に落ち着きました。こうして同年10月、ついに日本最初の旅のプロ集団「旅行作家の会」が誕生しました。

会員には加入条件を付けて厳選しました。まずは専門性を持っていること。私の場合は温泉と民芸でした。野口は登山と温泉、加藤は歴史、飯田は植物です。さらに紹介者が必要で、最低１冊旅の本を出していることも入会条件でした。当時、旅行記では一つの分野

で飯が食えるのは二人まで、が私の持論でした。勧誘の結果、40人の精鋭が集まり、旅行作家という呼び名は定着していきました。トラベルライターとして旅の情報を提供するだけではなく、大宅壮一や本多勝一のような、発見と感動にあふれた紀行文学を目指したのです。

その一方、精神科医でエッセイストの斎藤茂太さんを中心に「日本旅行作家協会」[4] が立ち上がりました。こちらから見ると、旅行作家とは言えないような方も見受けられましたが、「ペンクラブ」と同時に加入する旅行作家や旅行ジャーナリストもいましたね。

――最後に旅行作家が目指す紀行文学とはどんなものでしたか。

雪深い利根川源流を一人で探索したときのことです。突然、ボートを積んだ四輪駆動車が現れました。地方公務員をしているという若者でした。向こう岸の様子を取材すると言うと、「私が案内しましょう」と意外にも手を差し伸べてくれました。凍った湖面を割ってボートをあやつり進みながら、私がこの目で確かめたい場所すべてに連れて行ってくれました。別れ際お礼にと１万円札を渡そうとしたら、「そんなものをいただくためにご案内したのではありません」と即座に断られました。「私はあなたの夢をもらったのです」と。

旅における出会いと発見、感動とはこういうものです。どこに行けば何が見られて、何がおいしいか、きれいかといった情報だけでは、ドラマチックな旅情を伝えられません。

２．２．林荘祐（はやし・しょうすけ）＝2019年８月15日、東京都千代田区で

1942年、東京都生まれ。ジャーナリスト・旅記者。日本旅行作家協会顧問理事。朝日新聞、週刊朝日、アサヒカメラの記者を経て、大阪科学部次長。CS放送協議会（現・一般社団法人衛星放送協会）事務局長などを歴任。

――自ら「ジャーナリスト・旅記者」と名乗ってらっしゃいますが、旅行作家とトラベルジャーナリスト、トラベルライターの違いについてご説明いただけますか。

いずれも、旅や観光に関する文章を書いたり写真を撮ったりする仕事で、明確な違いがあるわけでなく、個々それぞれに思い思いの肩書を名乗っています。トラベルライターを名乗る人は一般に広い意味で旅の情報を提供する仕事です。スポンサーなりメディアの編集部の意向に沿ってまとめる機会も多いし、独自の発想でまとめる場合もあります。トラベルジャーナリストはそれに批判、批評を加えるよう努めています。もちろんトラベルライターで批判精神旺盛の人も少なくありません。旅行作家は一般の作家に近いと言えるでしょう。

近年、トラベルライターの仕事はともかく、トラベルジャーナリストが活躍する場は少なくなっています。批評や意見が書きにくくなっている現状はトラベル分野のみならず、ジャーナリズム全体の問題としてありますね。首相の街頭演説へのヤジを許さず、強制排除する時代になりました。一方、SNSでは旅や観光関係でも発信者の言いっ放しが目立ち、それに反応してしばしば炎上する。広告料など収入につながることが最優先で、質問や批評をやり取りする場にあまりなっていない印象です。旅行ジャーナリズムは自由な表現や批評をしにくい厳しい状況にあるようですね。

トラベルライターにとって、発表通りに書けば仕事はあります。しかし、宿代や交通費を全額出してもらう「あご足付き」の取材では、批判的な内容は書きにくい。旅行情報誌によっては、地域別のムックを発行する際、エリアの自治体や観光協会などに買い取ってもらうビジネスモデルも多いようです。テレビの旅番組も観ていれば想像がつきます。批判精神が強いと思われるライターに執筆注文

はあまり来ません。

――各地の旅行情報を取材する場が、現地へ行く以外にもあるのでしょうか。

現在、北海道、東北、関東広域、東海北陸、近畿、中国、四国、九州のブロックごとに管内の道府県を中心に自治体や観光関連会社が月に１回から年１～２回ほど東京で記者発表をしています。目玉施設がオープンするとか、名産の農産物が実る季節になったとか、多くの観光情報を提供する場になっています。なぜか東京都と沖縄県は発表の場がありません。また、年に１～２回の発表で足りるとする状況は疑問です。海外は各国政府観光局や大使館などが時々記者や旅行会社向けに発表します。旅行雑誌やトラベルライター、ジャーナリストのほか、多くのページビューを持つブロガーやインフルエンサーも取材に訪れます。

記者発表の一部は、PR会社が仕切るようになりました。一般に発表の場は出入り自由のはずですが、事前に申し込みを求められることが多くなっています。さらに、露出するメディアはどこか、いつ載るのかなどと事前に聞いてきたり、発表側が主催する取材ツアーの参加条件で今年度中に露出する場合に限るとしたり、せちがらくなったのでしょうか、条件が厳しくなっています。近年増えてきたのは、書いた原稿やゲラを事前に見せろ、発行したあとで訂正しろといった要求です。

とくにフリーライターには厳しいですね。私は従来メディアに所属する記者経験から、こうした要求をはねのけますが、一度試しに掲載前の原稿を渡したところ、細かい直しがびっしり返ってきました。「あなたはぼくのデスクですか」「この記事は広告ではないんです」「あなたに原稿料などいただいていません」などと言いたくなります。ある記事で、提供されたパンフレットにあるうたい文句を使ったら、別のキャッチフレーズを使ってくれと、訂正を迫られました。キャッチフレーズを変えたらしく、それを取材後なんの連絡もないのに、「あなたの原稿は間違っている」と攻めてくる。お金をもらわないボランティア原稿でさえ、この調子です。つまり発表者側の意図しないものはすべてバツなのです。表現する側の真っ当な取材を認めない傾向は社会的な風潮でしょうか。今の政権の体質にもつながる気がしてなりません。

――旅行について書く人たちの団体はありますか。

主な団体は、「日本旅のペンクラブ」（略称「旅ペン」）と「日本旅行作家協会」（略称「JTWO」「ジエイツー」）、「JAPAN NOW観光情報協会」（略称「JAPAN NOW」「ジャパンナウ」）[5] などです。私は取材のバランスや広がりを考えて、３つとも所属していますが、複数所属する人はほとんどいません。「旅ペン」は国内の旅を書いたり撮ったりする人が多く、松尾芭蕉が旅を始めた５月16日を「旅の日」と制定し、旅や観光の発展に貢献した人、地域、団体などを毎年表彰するなど活動しています。「JTWO」は海外に関心を持つ人が多く、旅の達人を顕彰する「斎藤茂太賞」を創設し優秀な紀行作品の著者を表彰したり、旅行ツアー企画で優れた業績を挙げた「ツアーオブザイヤー」を毎年選んだりしています。「JAPAN NOW」は観光庁など行政やインバウンド政策などに関心のある人たちが少なくない団体です。３団体のはっきりした棲み分けは無く、いずれも会員の旅に関するステータス向上と親睦の活動が主体です。

――これらの団体に入ったトラベルジャーナリストは、互いにしのぎを削り、腕を磨いているのですか。

新聞記者を長く務めた私から見ると、中堅ま

でのフリーライターや、ネットの旅情報に携わる人たちには、自由奔放な表現活動が目立ちます。原稿をきちんとチェックする人を通さないからでしょう。新聞社で言う校閲部門がない。気軽に書いた記事が話題になってちょっと売れたから何でも書けるような気がしているようにも見えます。「推敲を重ねる」など死語でしょうか。たまに新聞社の記事を書くとなると、厳しいデータの裏取りが求められ、修正が入り、「もう二度と新聞には書きたくない」と音を上げる人がいます。しかし、これはライターにとって成長への糧となる貴重な経験です。新聞社ももっと彼らが活躍する場を与えて、トラベルジャーナリズムの裾野を広げれば、信頼性や批評性といった新聞の価値が再認識される機会になり、読者も増えると思います。

2．3．沓掛博光（くつかけ・ひろみつ）＝2019年9月17日、東京都千代田区で

1946年、東京都生まれ。講談社『週刊現代』記者を経て、旅行読売出版社入社。月刊『旅行読売』の企画・取材・執筆にたずさわり、国内外を巡る。「魅力のコートダジュール」で、フランス政府観光局よりフランス・ルポルタージュ賞受賞。情報版の編集長を経て、取締役編集部長兼月刊『旅行読売』編集長に就任。旅行読売出版社編集顧問。月刊『旅行読売』、『定年時代』（朝日新聞折り込みフリーペーパー）、『旅行新聞』などに旅行記事を執筆。著書に『観光福祉論』（ミネルヴァ書房）など。筑波学院大学客員教授。

――トラベルジャーナリストの活躍の舞台を提供してきたのが旅行雑誌です。代表的なものを挙げてください。

JTB・日本交通公社の前身である日本旅行文化協会が1924年（大正13年）に発刊した『旅』が本格的な旅行雑誌の草分けです。66年（昭和41年）に（株）読売旅行が出した『旅行読売』と、73年創刊の学習研究社『ホリデー』、国鉄系の鉄道弘済会が77年に発刊した『旅の手帖』が代表的なものです。『旅』と『ホリデー』はすでに姿を消しましたが、これら4誌が重なって競い合っていた時代が、旅行雑誌の最盛期でした。

旅行雑誌の分野には、大手出版社もなかなか手を出せなかった。その理由は、『ホリデー』を除く3誌がいずれも旅行会社や鉄道会社をバックにしていたからです。各観光地の行政、観光協会、宿泊施設や鉄道など観光の軸となるところとつながるネットワークや営業システムが、旅行雑誌の編集企画、広告、販売と経営に大きく寄与していたのです。

こうした旅行雑誌より以前に、旅情報の書き手が活躍する場となったのがガイドブックです。古いものですと、江戸時代中期にまでさかのぼります。『旅行用心集』（八隅蘆菴著）という、旅の注意書きを記した冊子がありました。水が替わることへの用心、寒い国を旅するとき、船に酔ったときのよい方法、毒虫を避ける方法、疲れを癒す秘伝、旅の所持品について、空模様の見方、道中での日記の書き方などが満載です。これがガイドブックの原点と言えるでしょう。

――編集者、編集長として『旅行読売』をどのような旅行雑誌にしようと考えましたか。

これは私の代ばかりでなく、発刊から今日まで続いていますが、旅する人に役立つ、実用的な情報の発信を心掛けています。しかし、その編集企画は時代とともに変わってきました。90年頃までは例えば北海道、沖縄、信州などの地域の特集が中心で、それ以降は旅の目的やテーマに変わっていきました。温泉とか、一人旅といった企画です。エリアに絞った特集を掲載してきた先行雑誌との差別化を考え、テーマ別の特集をもって新規市場を開拓したのです。

その先駆けとなった93年の臨時増刊号「日帰り温泉とくとくドライブ」。関東周辺の魅力ある温泉を紹介したところ大当たりで、増刷となりました。「公共の宿」も好評でした。良質で安い宿である公共の宿は一般に公開されていながら、あまり知られていませんでした。これらの施設を全国数百カ所紹介しました。「ひとり旅」も刷り部数の95％ほど売れました。旅行雑誌業界としては稀なる高水準と言われました。

意外にも予想に反して振るわなかったのが「ぬるい温泉」。体にいいし、ゆっくり浸かれるので、事前の専門家の評価は高かったのですが、一般人にとって、温泉は熱くなければ受け入れがたかったのです。

旅行雑誌に限らず、雑誌ジャーナリズムは読者ニーズを掘り起こし、それにどう応えつつ収益を上げていくかという宿命を負っています。読者が求める情報をどう提供するか。60～70年代は、「駅を降りたら乗客は私一人だった…」といった叙述の紀行文が中心でした。これが受けていたのです。今日の読者は旅をするための情報そのものを必要としています。

――こうした旅への読者のニーズをどのように掘り起こしたのですか。

旅の現場の目の前にある絶景や食べ物などだけでなく、世の中全体の現象のバックグラウンドを見ていくことが大切です。そこから時代のニーズが見えてくる。例えば、バブルが弾け景気が後退しだした頃、東京駅八重洲口近くにある駐車場で温泉地などへ直行する観光バスの数が年々増えていきました。そこから直行バスの旅の人気を知りました。「ひとり旅」特集は、旅館の主人から女性の一人旅が増えたことを聞いたのがきっかけです。以前は女性の一人客が泊まると、不測の事態を警戒して、宿の主人は一晩中眠れなかった時代がありました。しかし、時代とともに経済的に自立し、「自分にご褒美」感覚で、他人に気を遣わずに済む一人旅を気軽に楽しむ女性が増え始めたのです。

地域おこしの相談を自治体から求められる機会がありますが、成功している他の観光地の物まねをやるのではなく、その時代や社会状況といったバックグラウンドを知り、今、求められているものを取り入れるよう助言しています。

――沓掛さんも「トラベルジャーナリズム」を大学で講じられました。トラベルジャーナリストの役割と定義について私見をお聞かせください。

今の話の延長で言うと、その時代その時代の状況をとらえ、今求められている旅行（観光 Tourism）情報をどう伝えるかを考えるのがトラベルジャーナリストと言えます。例えば高齢化社会の中で時間をかけて楽しむクルーズを取り上げるとか、グルメへの関心が高い女性層を意識し、産地で本物の味を伝える。私はラジオ番組でも旅の情報を紹介しています。電波メディアとの違いを認識し、記録性における活字メディアの優位性を活かす方向性も、トラベルジャーナリズムの役割と言えるでしょう。

ここで言うトラベルはビジネス出張、帰省、法事なども含めた旅行一般ではなく、楽しみを求める旅です。英語の Tourism にあたります。ですからトラベルジャーナリズムは、今の時代に求められている楽しみは何か、高齢者が求めている楽しみは何か、ファミリーが求めている楽しみは何かなど、人がその時代に求める楽しみを自分も求め、探ることを基盤にして成立するジャーナリズムと捉えています。旅は時代を映す鏡だと考えるからです。

ですから本来なら「ツアージャーナリズム」なのでしょうが、「ツアー」だと旅行商品のイメージがつきまとう。「観光ジャーナリス

ト」も狭い範囲に取られがちな感じがします。「旅行ジャーナリズム」「旅行ジャーナリスト」あたりが妥当なところでしょうか。「観光」という概念も、国の審議会答申による覚書程度でしか定義付けられていません[6)]。一方、欧米では「ツーリズム」の概念に、観光以外の経済効果を生む移動すべてを包含させており、我が国の定義付けとは大きな差異があることも指摘しておかなければなりません。

――旅行の情報の担い手は紙媒体からネットが主流になっているようです。その過程と今後の行方を教えてください。

紙媒体が弱体化しているのは間違いありません。ガイドブックも発信力が弱まっています。ネットに比べ、読者に届く速度が遅く、その分データも取材した時点とは異なり、いざそこへ行くとなるとネットなどで再度調べることになり、手間と時間がかかるからです。ネットがない頃は当たり前でしたが、活字を読むことからマーケットが離れてしまいました。

70年代にはテレビの旅番組のスタッフから、旅のコンテンツを求めてうちの編集部に問い合わせがあったものです。その後、ネットの鉄道乗換案内アプリを作る会社から、日帰り温泉のデータをナビに入れたいので提供してほしいと言われました。今となっては、彼らも情報収集力や企画力を十分蓄えてきています。雑誌のセグメンテーション、ターゲティングは難しい。雑誌は読者とともに年を取っていきます。若い書き手が育ちにくいのも悩みです。志のある若者がいても、現在はSNSなどの新しいメディアの方へ関心は向いているようです。

とはいえ情報のフィルター役を果たすという旅行ジャーナリズムの使命は消えません。SNSの情報には提供側の言われたままを、裏取りをせずに流してしまうケースも見受けられます。紙であれネットであれ、一定のフィルター機能を果たし、信頼性のある記事を発信することで、旅行ジャーナリズムは読者のリスペクトを保持できると思います。

2．4．前川健一（まえかわ・けんいち）＝2019年８月28日、東京都千代田区で

1952年、東京都生まれ。73年のアジア旅行を手はじめに、世界各国を旅する。88年『東南アジアの日常茶飯飯』（弘文堂）で食文化を書いて注目され、以後アジアを中心とした旅行･文化についての執筆で活躍。著書に『アフリカの満月』『東南アジアの三輪車』（旅行人）、『タイ様式』『アジア・旅の五十音』（講談社文庫）、『まとわりつくタイの音楽』（めこん）他。

―立教大学観光学部で「トラベルジャーナリズム論」を講じてこられました。「トラベルジャーナリズム」という概念をどのように捉えて教えましたか。

2005年４月から2019年３まで毎年100人から200人の学生を教えました。大学からは何をやってもいいと言われ、手探りでやってきました。「トラベルジャーナリズム」を講じるに当たり、「トラベル」と「ジャーナリズム」という二つの概念を説き起こして教えました。

「トラベル」は語源のフランス語で張り付け拷問の三本柱を象徴します。それが転じて「トラバーユ」（労働）となりますが、もともと「苦行」を意味していました。「旅」は鉄道や車のない時代において苦しみだったのです。

ジャーナリズムは、批評があってこそ成り立つ概念です。「どこそこに行きました」「おいしいものを食べました」だけでは、ましてやフェイスブック（Facebook）やインスタグラム（Instagram）での記述では、トラベルジャーナリズムにはなりえません。

――旅行をアカデミックに追究するスタンスは？

「観光学」は世にあふれています。観光業者と学者が結びつき、地方は誘客に走る。ホテルの経営が観光であるとの実学志向です。ホテル経営コース（College of Hotel Administration）がある米国コーネル大学（Cornell Univrsity）が発祥です。田舎のホテルは、単にホテル経営のマネジメントだけではなく、地元の観光資源の活用による町おこしが必要なわけです。コーネル大学卒業で成功した観光業者として、私が挙げたいのは「星野リゾート」の星野佳路[7]と「デューティーフリーショッパーズ（Duty Free Shoppers＝DFS）」創業者のチャールズ・フィーニー[8]です。立教大学観光学部も富士屋ホテルが出資[9]して誕生しました。

これに対し、「旅行学」は観光産業に寄与することだけを目的にしたものではなく、旅そのものを考える立場です。旅行業界が現在どうなっているか。その歴史や背景を探る研究ですが、旅行史の業績は本当に少ない。50年から60年までのガイドブックが大学に保存されていない。64年に海外旅行の自由化が行われた理由もはっきりとはわからない。当時の世界経済情勢の大きな変化が背景にあったわけですが、経済史に記述があっても、旅行史にはない。なぜなら、文化人類学や社会学と同じように、旅行学はおカネにならないからです。売春やドラッグ、観光地への悪影響など、観光のマイナス面を追究する「ダークツーリズム研究」も同様です。

講義の中では、地に足の着いた「言語社会学」を教えました。日本人が外国語に弱いのは、日本語で足りている民族であるからに過ぎません。このような国は世界でわずかであり、多くの国の人々はいくつかの言語を習得しないと生きていけません。家庭と学校、職場で話す言葉が違う国があります。多言語が生活と密着しています。

インドネシアでは、交易に使ったマレー語やジャワ語、スンダ語、福建語などを使います。とくにジャワ語は敬語が日本語以上に複雑です。日本語は敬語があるから難しいという話も信憑性に欠けますね。ベルギーは公用語をフランス語とオランダ語、ドイツ語とする言語境界線があります。スペインではカタルーニャ語を使う人々の独立運動が中央政府との軋轢を生んでいますし、近代化を早く成し遂げたトルコはトルコ語以外の少数言語による会話を法律で禁じました。これら海外の言語を巡る現状を理解した上で、旅の意味を考えるのが狙いです。

――紀行作家になったきっかけは何ですか。

高校を出て、いろいろな仕事をした後、「週刊朝日」に寄稿するライターが知り合いにいて、「旅をして書いてカネになる仕事がある。とくにアジアについて書くライターや評論家が不足している」と言われたからです。20代後半になって、ケニアのナイロビでの定点観測を思い立ちました。しかし、遠いし費用はかかるしネタも少ないので、近いところでタイのバンコクを選びました。約10年間滞在し、観光情報や屋台の料理など文化や風俗を深く追究しました。バリ島にも１カ月いましたが、70年代はまったく日本人に会うことがなかった。当時の日本人にとって、東南アジアは売春などのダーティーなニーズはあっても、観光地として楽しむ場所ではなかったのです。せいぜい新聞記者の駐在員が赴任地を離れる際に滞在記を本にして出版することがあったくらいです。

バブル期になると、エスニックブームの後押しがあり、東南アジアの注目度は高まって、ずいぶん原稿を書かせてもらいました。一番お金になった仕事は、カード会社のPR誌や航空会社の機内誌です。「400字原稿用紙100枚以上書く数多くのコラム」という仕事です。軽いエッセイや広告コピーなどではな

く、雑誌１冊分をほとんど書くのですから、楽な仕事ではありませんが、匿名で１本書いた原稿料が100万円を超すこともありました。スポンサーから受注した広告代理店が編集プロダクションに委託し、その仕事が回ってくるのです。２か月間しばらく何もせずに食べていかれると思うほどでした。次の旅の取材費に回して準備していたら、いつの間にかバブルはしぼみました。

――旅行についての読者のニーズはどのように変わってきましたか。

まだ日本人が海外に行けなかった1950年代、ボーボワールの小説を読んでパリに憧れた時代の読者と、LCC で格安旅行ができる現代の読者はまったく環境が異なります。すでに紀行文学の意味がなくなったとさえ言えるかもしれません。作家が海外に赴き、思索の旅を著すケースは少なくなりましたね。旅行雑誌の休刊が相次ぐなど、メディアの力が落ちたことも、プロの書き手が活躍する場を失わせています。

SNS などデジタルメディアの普及で読者の大衆化が一気に進んだこともあります。すべてのことに対する関心がより薄くなっている。一例としてタイのケースを挙げますと、タイに住んでいる日本人は近年増えていますが、彼らのほとんどは住んでいる場所に何の関心も持っていません。タイの日本人滞在者は年金生活者か、日本で食いっぱぐれた比較的若い人たちです。わずかな年金でも豊かな生活ができる。コールセンターで月10万円稼げば、プール付きの賃貸マンションで暮らせます。ネットテレビで日本のニュースも見られます。現地の言葉も学ぶ必要がなく、現地の人々や文化と断絶して生活しているわけです。

――最後にトラベルジャーナリズムが成り立つ世界はどこになるのでしょうか。

いわゆるアカデミズム、学問の世界でしょう。「JTB 総合研究所」や「旅の文化研究所」のような研究機関や大学です。トラベルジャーナリズムを担う人はこういった場所の研究員や教員になるでしょう。芸術や技術など専門領域を持った評論家のような立場の方も活躍できるのではないでしょうか。トラベルライターの仕事は、与えられたテーマと狙いに合わせて、端正な文章をもって読者を誘う職人技です。これに対し、一定の意図を離れて、旅行全体を考えるのがトラベルジャーナリストです。

２．５．橋賀秀紀（はしが・ひでのり）＝2019年７月９日、茨城県つくば市で

1969年、東京都生まれ。全都道府県のほか、海外渡航国数116か国、渡航歴は200回以上。WEB で『文春オンライン』『プロが教える「旅の新常識」』『CREA WEB』『プロがこっそり教える賢い海外旅行術』を連載。『週刊東洋経済』で「サラリーマン弾丸紀行 Traicy 橋賀秀紀のフカボリ！」、『季刊航空旅行』で「航空旅行の常識を疑え！」を執筆。おもな著書（いずれも共著）に『エアライン戦争』（宝島社）、『エアライン GUIDE BOOK 最新版』（イカロス出版）、『世界の機内食』（イカロス出版）、『エアラインサービス完全活用読本』（イカロス出版）。筑波学院大学非常勤講師。TABICA 街歩きガイド。

――「トラベルジャーナリスト」という肩書を名乗り、名刺にも刷っていらっしゃいますが、まずは「トラベルライター」ではなく「トラベルジャーナリスト」を名乗る理由から。

仕事の内容を厳密に考えると「ライター」が近いのかなとは思いますが、それでは軽い印象を相手に与えます。「ジャーナリスト」は「箔づけ」でしょうか。取材する際に、相手に「怪しい者ではありませんよ」と伝え、きちっと取材して記事に反映させる信頼を

持ってもらう方法かと。「ライター」ですと、単に個人的な旅行をして、そのまま書くだけ。最近はブロガーが増えて、さらにわかりにくくなっています。

――旅行について書く職業のビジネスモデルはどのようなものになりますか。

あまりもうからない仕事。ガイドブックを書きながら、頑張っている仲間を見ていても収益は上がっていない。私の場合、本業があって、その合間に旅行して書いているので、取材経費をねん出できますが、旅行一本だったら支出を減らすしかありません。つまりスポンサーとタイアップし、旅費を出してもらうしかないのです。そうなると記事内容の中立性は保ちにくくなる。いやでもスポンサー寄り、旅行者目線からの批判にブレーキがかかります。タイアップでなくても、付き合いがあれば、ある程度ブレーキはかかる。これは新聞記者にもあてはまるのではないでしょうか。ホテルや航空会社などスポンサー側も、トラベルライターを使えば、広告を打つよりも少ない予算で効率よく商品やサービスをアピールできます。

――橋賀さんご自身、タイアップして記事を書いたことはありますか。

何度かはありますが、丸抱えは基本的にありません。タイアップすると記事内容の中立性が保たれなくなると言いましたが、タイアップであっても、ネガティブなことをあからさまに書かなければ、自由度の幅の中で表現はできます。時々、旅行代理店の方の顔がちらつくことはありますが。政府観光局が予算を持っているジャーナリスト招待旅行では、プラス面しか書けません。でも 面白くないものは書かない。読者には行間を読んでもらうしかありません。一般の旅行者が自由に書き込むWEBの「トリップアドバイザー」も個人の感想ですから、ポジもネガも保留して読む姿勢が大事ですね。

――WEBでの寄稿が多いようです。メディアの編集部はタイアップ、つまりヒモ付きでないことを期待していませんか。

その点をどうこう言われることはありません。ただし、WEB媒体はページビュー（PV）などの通信簿がすぐに出るシビアな世界です。つまり完全に読者目線が優先されるわけです。知り合いの女性誌のWEB編集者によると、女性誌であっても、ただ美しくきれいで微温的なものより、モノクロームの現実的なものが評価される傾向があり、そのバランスが難しくなったそうです。サプライヤー目線ではなく旅行者目線。現地の様子や航空料金など、実際はどうなのかが問われている。ただ宣伝ばかりして、どうしたら安く行けるかという自腹で行く人たちのニーズを封印してきたのです。

――旅行作家とトラベルライター、トラベルジャーナリストの違いをどのようにお考えですか。

旅行作家は第一義的に文章そのものを商品としている。読者はそこに付加価値を見出し対価を投じます。文章力のあるトラベルライターやトラベルジャーナリストもいるかもしれませんが、あくまで現地の情報を得たいといった実用的なニーズに対応する職であると考えます。私の知人でもトラベルライターの仕事をしつつトラベルジャーナリストと名乗っている人が何人かいます。職業的なスタンスからすると、軸足を旅行業界（航空会社・ホテル・旅行会社）サイドに置くのがトラベルライター、ユーザーサイドに置くのがトラベルジャーナリストでしょうか。私のメインの仕事は後者ですが、金銭の発生のあるなしにかかわらず、多少なりとも業界に配慮して書くことがないとは言えません。

――そうした取材の経験を活かして、筑波学院大学のコミュニティカレッジで社会人を対象に格安チケットの入手方法や珍しい国や地域の紹介についての短期講座を持っておられますね。

LCCの時代を迎え、格安海外旅行のニーズが高まっています。例えば静岡から中国東方航空で上海へ、カタール航空でプラハまで行って4万3400円です。静岡まで新幹線で足を運んでも十分に安い。8月や正月のトップシーズンでさえ、アテネやローマ、パリが4、5万円台です。中国の吉祥航空の羽田―トロムソ（ノルウェー）は9月限定で5万5000円でした。先週訪れたトルクメニスタンは現地情報が少なく、十分な予習が必要でした。

――旅行についてお書きになる場合、どのような予習が必要なのでしょうか。

インプット（予習）と旅（現地調査）、そしてアウトプット（執筆）が一連の作業になります。予習に関して言いますと、まずはキーパーソンを見つける。Amazonで国名を検索し、その国に詳しい第一人者らしき執筆者の本を探します。その方のブログやFacebookを見つけたら、連絡を取って最新情報を得ます。トルクメニスタンの場合は、航空券から現地のホテル代まで、在日大使館で支払ってから出かけました。

旅行雑誌が全盛の90年代はハワイや台湾などの近場に偏り過ぎていました。今はかなり行先が多様化しているように見えますが、出版もネットもまだ偏りがちです。イースター島に行ったときも現地の人にコンタクトを取り最新情報をもらいました。知りたいことを具体的に箇条書きにして相手が答えやすくしています。予習は手間と気合が大切ですね。

また、動画検索によるマップの活用が役に立ちます。YahooやGoogleの検索窓のマップのほか、とくに「maps.me」（マップス・ミー）[10] というアプリケーションをダウンロードしておくと、現地でもオフラインで使えて便利です。

――長くて深い海外取材経験から一般旅行者へのアドバイスをお願いします。

行き先を知名度に頼らない。選択肢はいっぱいあるのに、宣伝広告情報ですでに決めてしまっている人が多いですね。最近はインスタグラムの写真から入っていくケースが多い。例えば、ウユニ湖を見てから、その国がボリビアであることを知る。見所のない国はありませんから、いろいろ調べて選ぶといいでしょう。

次に民泊とウーバーについて。外国の場合、危険なイメージが付きまといますが、利用の仕方によっては便利で安全です。民泊はホテルのように24時間空いていませんが、料金は安い。ウーバーはむしろタクシーより安全かもしれません。ただし、広い場所に呼んだときは探すのが大変です。空港からはタクシー、ホテルからはウーバーと使い分けるのがいいでしょう。

海外旅行保険に加入すべきかどうかは価値観の問題です。保険会社は説明してくれませんが、国民健康保険やクレジットカード保険でも最大90日間カバーできます。現地での高額医療は対象外ですが、こうした事例は年10件あるかないかです。

ホテルはできるだけ見所が近くにある旧市街地を選びましょう。移動時間が少なく、時間を有効に使えます。観光は夜よりも早朝重視で。いい写真が取れますし、活気のある市場を巡れます。日中はどこも込み合いますから。一日中歩くとかなり疲れますので、あまりスケジュールを詰め込まずに。昼にホテルに戻ってひと休みできるのも旧市街地ならではです。夜間に空いている博物館もあります。天気予報は現地に着いてから確かめ、雨の日は屋内観光するなど、スケジュールに生

かしましょう。

トランジットが6時間もあるなら、空港や駅のロッカーを利用しての市内観光をおすすめします。荷物は小さく機内持ち込みサイズに抑えましょう。ロストバゲッジを回避できますし、空港に着いてすぐ出られます。私はガイド本もパソコンも持ちみません。ガイド本の地図を切り取り、そこに情報を書き込むだけです。

3．トラベルジャーナリズムの実態

3．1．紀行文から旅の情報提供へ

以上、5氏へのインタビュー内容はそれぞれが活躍された時代の流れを辿る形で紹介した。旅に関する言論活動の担い手とそのコンテンツがどのように入れ替わり、変容してきたかを追うためである。

1960年代に旅行作家としてデビューした山本鉱太郎は、数々の紀行文を著す傍ら、旅行案内記（ガイドブック）の歴史を調べて、『旅行案内記三百二十年』を自費出版している。この中で山本は、わが国の最初の旅行案内記を1655年（明暦元年）の『道中記』（作者不明）だとし、トラベルライターの元祖としては、『都名所図会』を著した秋里舜福を挙げている。明治時代に入ると、志賀重昂の『日本風景論』や小島烏水の『日本山水論』といった紀行文学が次々と発表される。田山花袋も紀行文を買われた一人である。大正から昭和に移ると、山水から趣味の旅に人々の関心が移り、松川二郎の『珍味を求めて舌が旅する』が出る。いわゆるグルメ本である。旅行雑誌の嚆矢とされる『旅』が創刊され、多くの作品の発表の場となる。鉄道省からは全国の主要寺院を鉄道線路別にまとめた『お寺まゐり』も出版された。戦後は本格的なレジャーブームに乗って、『ブルーガイド』などのガイドブックが数多く創刊される[11)]。

こうした旅行案内記に旅行情報を集める「トラベルライター」としての活動もしていた山本は、紀行文学の再興を願って「旅行作家」を標榜、「旅行作家の会」を設立し、「発見と感動にあふれた紀行文学」を目指した。これに対し『旅行読売』の編集長を務めた沓掛は、こうした紀行文形式の作品が読者に評価されていたのは1970年代までだったと振り返る。「旅する人に役立つ、実用的な情報の発信」を重要視するとともに、旅の楽しさを魅力ある文体をもって提供することを目標としたのである。

東南アジアとくにタイに長く滞在し旅行記を書いてきた前川は、戦後70数年の中で、旅行に対する読者のニーズが大きく変わったことを指摘した。一般の日本人が海外渡航できなかった時代から、LCCで格安旅行ができるようになった時代への環境の激変を背景にしている。さらにSNSなどデジタルメディアの普及により、紀行文の重要性が低下したとするのである。前川の『旅行記でめぐる世界』の巻末にある「戦後の旅行記年表」からも、これをうかがい知ることができる（末尾にこの一部を一覧表にまとめた）。

WEBの旅情報の世界で活躍する橋賀は、サプライヤー目線の宣伝から、旅行者目線への脱却を宣言した。航空料金をどうしたら安くできるかなど、これまで封印されてきたニーズに応える方向転換である。

これらのインタビュー内容を時代別に総括すると、ガイドブックのような旅行案内記は古くは江戸時代から存在し、これに対応する書き手も実在した。書き手は戦後、米国の呼び名としての「トラベルライター」と呼ばれるようになり、この肩書を持つ人々が今なお活躍を続けている。山本たちが「旅行作家」と自ら名乗る団体を立ち上げ、旅の旅情を格調高く謳い上げる「紀行文学」を目指した。一方、海外へ気軽に行けるようになった読者のニーズは、紀行文から詳細な現地情報に再びシフトしたのである。旅の思い出をつづり

発表する機会はフェイスブックやインスタグラムで一般人にも広がり、プロの書き手との垣根を壊しつつある。

3．2．トラベルジャーナリストの定義

山本によると、トラベルライターは「原稿料は安く、署名入りも少なく、いい待遇とは言え」なかったという。橋賀も「あまりもうからない仕事」としている。旅行経費を自腹で賄いながら、原稿料で暮らすことは昔も今も難しい。旅行雑誌に勢いがあった頃は、経費と原稿料を合わせて支給されたが、紙の旅行雑誌が部数を落とし、休刊した影響は大きかった。

その象徴が、1924年に旅行雑誌の草分けとして誕生した『旅』である。70年代前半に50万部を発行していたのをピークに発行部数は下がり続け、抱えきれなくなった発行元のJTBパブリッシングは2003年、新潮社にその経営を明け渡す[12)]。発行部数が5万部に下がると12年、新潮社も休刊を決め、88年間の歴史の幕を閉じた[13)]。トラベルライターの活躍の場は、前川が挙げたような航空会社の機内誌やカード会社のPR誌、さらにWEBの旅行サイトなどに広がっていく。

「トラベルジャーナリスト」の意味と定義について、山本たちが自らを名乗る名称を検討する際に、「紀行家」「旅行家」「旅行作家」「街道作家」「紀行文学者」「紀行作家」が挙がったものの、「トラベルジャーナリスト」は候補に入らなかった。この呼び名を名乗る書き手も少なかったと想像される。

林によると、トラベルライターはスポンサーやメディアの編集部の意向に沿って、旅の情報を提供する。トラベルジャーナリストはそれに批判や批評を加える書き手だという。前川もジャーナリズムは批評があってこそ成り立つ概念とする。旅行を調査研究する立場として「観光学」と「旅行学」という二つの探究指向を示し、観光学はホテル経営をベースに観光業界の利益と結びついた実学指向であり、旅行学は旅行の歴史や背景を探る研究指向であると述べる。前者に依拠するものがトラベルライターであり、後者はトラベルジャーナリストということになる。

沓掛はトラベルを旅の楽しみに特化した観光（Tourism）と捉え、この様態を読者にどう伝えるかを考えるのがトラベルジャーナリストの仕事であるとする。このためには、「世の中全体の現象のバックグラウンドを見ていくことが大切」であり、そこから「時代のニーズが見えてくる」という。トラベルライターが旅の情報を注文通り書く仕事だとすれば、時代の空気を読みながら読者のニーズを掘り起こすのがトラベルジャーナリストだということだろう。

橋賀によると、旅行作家は第一義的に文章そのものを商品とする職であり、トラベルライターやトラベルジャーナリストは現地の情報に対する実用的なニーズに対応する職だという。さらに、軸足を旅行業界（航空会社・ホテル・旅行会社）サイドに置くのがトラベルライター、ユーザーサイドに置くのがトラベルジャーナリストだと定義づけた。

トラベルジャーナリストを名乗る書き手は現在多いものの、その意味を深く自覚していないケースがある。橋賀自身、仕事の内容は「『ライター』の方が近いかもしれない」としながらも、「それでは軽い印象を取材相手に与え」てしまうため、トラベルジャーナリストを名乗る面もあるという。「『トラベルジャーナリスト』は『箔づけ』」「相手に『怪しい者ではありませんよ』と伝え、きちっと取材して記事に反映させる信頼を持ってもらう方法」というのだ。「私の知人でもトラベルライターの仕事をしつつトラベルジャーナリストと名乗っている人が何人かいます」としている。WEBサイトを閲覧すると、このようなケースは数多く散見される。

「トラベルライター」から「トラベルジャー

ナリスト」に肩書きを意識的に改めた寺田直子[14]のような例もある。取材費を自らまかなっての著作『ホテルブランド物語』[15]で、18ブランド43施設に及ぶ世界の有名ブランドホテルを取材し、一流のもてなしの哲学を紹介した。呼称変更のきっかけを寺田は、米国の同時多発テロとスマトラ島沖地震とする。世界の社会情勢に大きな影響を受ける旅行は平和があってのことと痛感し、社会的使命を果たす責務を感じたからだという。

3．3．旅の書き手の言論の自由度

旅の仕事以外に本業があれば取材費をねん出できるが、旅行だけとなると支出を減らさざるを得ない。旅費をスポンサーやメディアに頼ることになる。その結果、「記事内容の中立性は保ちにくく、スポンサー寄りとなり、旅行者目線からの批判にブレーキがかかる」（橋賀）。

林によると、ジャーナリズム全体の傾向として、批評や意見が書きにくくなっており、トラベルジャーナリストの活躍の場も少なくなっているという。「発表通りに書けば仕事はあります。しかし、宿代や交通費を全額出してもらう『あご足付き』の取材では、批判的な内容は書きにくい」とする。旅の書き手には、旅費のねん出と自由な言論というジレンマが宿命的に付きまとう。

トラベルジャーナリストの仕事を旅行学の上に想定した前川は「文化人類学や社会学と同じように（中略）おカネにならない」とする。多くの国家予算が投じられるインバウンドなどの観光政策につながるツーリズムと比較してのことである。

批判と論評の発表に制約が生じやすく、経済的にも自立しにくい。それがトラベルジャーナリストの現状と言えるだろう。

4．まとめ

ここまでの論旨を踏まえ、トラベルジャーナリズムの様態を、コンテンツ形式と書き手の二つに分類して考えてみる。

まずコンテンツ形式においては、現在のガイドブックに当たる旅行案内記があり、紀行文があり、その他もろもろの旅行記があると想定される。旅行案内記は古くは江戸時代から普及し、多くの人々に読まれた。旅行案内記の需要は、今のデジタル時代においてさらに拡張している。一方、紀行文は最古の作品を『土佐日記』とする説もあり、旅行案内記をしのぐ長い歴史を持つ。一部の読者からいまだに人気を失ってはいないが、需要そのものは旅行案内記に比べ落ち込んでいるかに見える。

それぞれのコンテンツ形式を支える主な書き手は、旅行案内記がトラベルライター、紀行文が旅行作家、その他もろもろのすべての旅のコンテンツを批判・批評をもって書くのがトラベルジャーナリストと当てはめることができる。

トラベルライターはWEBサイトを中心に浅く広く、多くの仕事をこなしている。一方、旅行作家は、とくに旅行雑誌の休刊などにより、発表の場を減らされている。批判や批評を含むトラベルジャーナリストも、今日のジャーナリズム全体が直面している状況から、その活動領域が狭まってきていると言わざるを得ない。

とはいえ、旅行史や業界分析といった本格的な研究の重要性が損なわれることはない。トラベルジャーナリストが生き残る主要な場は、研究機関や大学などアカデミズムの領域に限られ、研究員や教員のほか、芸術や技術など専門領域を持った評論家らがその担い手になるだろう。一方、トラベルジャーナリストを名乗るトラベルライターは、観光業界に資する形でこれからも多くの作品を発表し、

活躍していくだろう。

旅行作家による紀行文、トラベルライターによる旅行情報、トラベルジャーナリストによる批評や解説という三つの成果物の優劣を、性急かつ単純に比較、評価すべきではない。それぞれの史料としての価値の評価は、後世に委ねられるからである。もとより、評価すべきは読者それ自身である。旅情あふれる紀行文に浸りたいとき、旅先の現地情報を詳しく知りたいとき、旅行業界や観光行政のあり方についての論考を期待するとき、一人の読者に複数の旅へのニーズが浮かんでは消える。話をうかがった５氏に共通していたのは、旅の素晴らしさを読者に伝えたいという情熱だった。ここにこそ、トラベルジャーナリズムの未来と可能性が期待されるのである。

注

1）いずれも2019年10月８日閲覧。

2）朝日新聞社発行『アサヒグラフ』昭和42年11月24日号 p76-77

3）1962年６月28日に設立。旅の文化の向上と自然環境保護や地域活性化のため、取材例会、観光振興への提言など続けている。会員約130名、会友（旅館・民宿・飲食店の主人・女将ら）30名余で構成。会員には旅行ジャーナリスト、ライター、WEB ライター、編集者、作家、歌人、写真家、画家、弁護士、建築家、大学教授など。かつて永六輔、推理作家・脚本家の辻真先らが在籍。歌人・若山牧水の弟子の大悟法利雄、民俗学者の宮本常一、漫画家の宮尾しげお、動物文学作家の戸川幸夫といった人々も会員だった。

4）旅行に関連した仕事をする作家、ジャーナリスト、ライター、編集者、写真家、画家、漫画家、放送関係者、翻訳家、研究者並びに広報担当者等の専門家団体として1973年に発足。会員約200名。初代会長は斎藤茂太。二代目は兼高かおる。現会長は下重暁子。会員の親睦と協調を図り、政治、思想、宗教にとらわれない中立的な立場で、旅行会社と一般旅行者に正確な情報を提供することなどを目的としている。かつて動物写真家の田中光常や戸川幸夫らも会員だった。

5）顧客用文化情報誌として、ホテルの客室に置かれた日英対訳の年間誌「JAPAN NOW」の名称を受け継ぎ、「観光による国と都市の再生と振興」というテーマの下、2003年設立。グローバル社会における観光情報発信、観光による交流を視野に、観光に関する出版物、研究会、見学会を定期的に実施している。

6）観光政策審議会答申（1969年・昭和44年）で「観光とは自己の自由時間（＝余暇）の中で、鑑賞、知識体験、活動、休養、参加、精神の鼓舞等、生活の変化を求める人間の基本的欲求を充足するための行為（＝レクリエーション）のうち、日常生活圏を離れて異なった自然、文化等の環境のもとで行おうとする一連の行動を言う」と定義。見解を再検討した平成７年答申では「日常生活圏を離れて行う様々な活動であって、触れ合い、学び、遊ぶということを目的とする」としている。

7）1960年、長野県生まれ。83年に慶應義塾大学経済学部を卒業後、米国コーネル大学ホテル経営大学院へ留学。91年、星野リゾートの代表取締役社長に就任。マネジメントに特化する新機軸を打ち出し、「星のや」、「界」、「リゾナーレ」の３ブランドを中心にホテル・リゾート施設を展開。2016年に日本旅館「星のや東京」を東京・大手町にオープン。日本旅館を世界のホテルのカテゴリーに位置付けることを目指す。（「経営者通信41号2016年10月号」から引用、抜粋）

8）ニュージャージー州エリザベス生まれ、カトリック系労働者階級の家庭で育った。朝鮮戦争に空軍の通信兵として従軍。除隊後、コーネル大学に進み、卒業後はヨーロッパの各港で免税の酒を船乗りへの販売を始め、同窓生のロバート・ミラーと共に1960年、DFS（デュー

ティー・フリー・ショッパーズ）を創業。ハワイで日本人観光客相手に洋酒とくにブランデーを大量販売し、富を蓄える。1996年に同社をフランスのLVMH（ルイヴィトンモエヘネシー）に売却。総額75億ドルともいわれる資産は全て82年に創立した慈善団体に移管されている。大富豪であるにもかかわらず、質素に暮らし、巨額の寄付についても名前が表に出ないように計らった。（Low-profile retail titan's gift to UCSF: $100 million By Victoria Colliver Updated 9:51 am PST, Thursday, February 19, 2015 2019年９月８日閲覧から筆者が抄訳）
https://www.sfgate.com/bayarea/article/Low-profile-retail-titan-s-gift-to-UCSF-100-6088596.php

9）前身は卒業生である山口正造が晩年に寄付した資金によって設立された社会学部観光学科。（砂本文彦『近代日本の国際リゾート　一九三〇年代の国際観光ホテルを中心に』p524、立教大学観光学部「立教観光クラブニュース　第92号」３ページ「山口正造氏と立教大学」を参照）

10）オープンストリートマップを使用したオフライン使用地図を提供するモバイルアプリ。
https://maps.me/

11）江戸時代の庶民の楽しみである旅道中の案内記から1975年までの旅行雑誌の創刊ラッシュまでを年表にしてまとめているほか、「戦後刊行された旅の案内書1200冊」を網羅している。

12）2003年９月25日付朝日新聞「JTBの旅行雑誌『旅』が新潮社発行に」

13）2011年11月22日付朝日新聞「『旅』の終着点初の旅行雑誌、休刊へ」

14）寺田直子　トラベルジャーナリスト。旅歴30年。訪れた国は約90か国。ホスピタリティビジネス、世界の極上ホテル＆リゾートに精通。雑誌、週刊誌、ウェブ、新聞などに寄稿する他、ラジオ出演、講演など多数。著書に『ホテルブランド物語』（角川書店）、『ロンドン美食ガイド』（日経BP社共著）、『泣くために旅に出よう』（角川書店）、『フランスの美しい村を歩く』（海教育研究所）など。＝ブログ「ハッピー・トラベルデイズ」から転載

15）『ホテルブランド物語―人材を育てる一流の仕事とは?』（角川新書oneテーマ21）2006年９月１日

参照文献

沓掛博光「旅行雑誌から見た旅の変遷に関する考察―月刊旅行読売を事例として―」筑波学院大学紀要第５集67-79ページ

岩田隆一「旅行者はどこから来るのか」筑波学院大学紀要第９集研究ノート　31-36ページ

岩田隆一「旅行者はどこから来るのか（２）」筑波学院大学紀要第10集研究ノート　23-29ページ

山本鉱太郎「旅行案内記三百二十年」（昭和50年５月１日発行）自費出版

「旅行作家　旅行作家の会会報１」（昭和43年10月１日発行）

旅行作家の会刊「旅行作家1971あき号」（昭和46年９月10日発行）

日本旅のペンクラブ編「旅びと2012　創立50周年記念号」（2012年５月16日発行）

大前　仁、木村由香里「なるにはBOOKS　135ライターになるには」2009年９月10日発行ぺりかん社　p10-21 「旅を伝えるメッセンジャーとして　トラベルライター　寺田直子さん」

小牟田哲彦「旅行ガイドブックから読み解く明治・大正・昭和　日本人のアジア観光」草思社、2019

田村研平「日本人は何を見たか？―海外旅行記の昭和史」社会思想社、1995年６月30日

＜戦後から20世紀までの旅行記年表＞

（前川健一著『旅行記でめぐる世界』年表から一部転載）

発行年	タイトル	著者	出版社
1948	戦後の世界を飛ぶ	高田市太郎編	日本交通公社
1952	欧米千時間の旅	後藤武男	誠文堂新光社
1953	巴里ひとりある記	高峰秀子	映画世界社
	外国拝見	門田勲	朝日新聞社
1955	モンマルトルの空の月	中川一政	筑摩書房
	女ひとりの巴里ぐらし	石川好子	鱒書房
	世界の裏街道を行く　第一巻	大宅壮一	文藝春秋新社
1956	世界の裏街道を行く　第二巻	大宅壮一	文藝春秋新社
	モゴール族探検記	梅棹忠夫	岩波新書
1957	インドで考えたこと	堀田善衛	岩波新書
	ネパール王国探検記	川喜田二郎	光文社カッパブックス
1958	知られざるヒマラヤ　奥ヒンズークシ探検記	本多勝一	角川書店
	お嬢さん放浪記	犬養道子	文藝春秋新社
	南極越冬記	西堀栄三郎	岩波新書
1959	インカ帝国	泉靖一	岩波新書
	秘境ブータン	中尾佐助	毎日新聞社
	世界とぴある記	兼高かおる	光書房
	未開の顔・文明の顔	中根千枝	中央公論社
	裸体と衣裳　日記	三島由紀夫	新潮社
1960	ふうらい坊留学記　日本青年、アメリカ西部を荒す	安川実	光文社カッパブックス
	どくとるマンボウ航海記	北杜夫	中央公論社
	英語と英国と英国人	吉田健一	垂水書房
1961	何でも見てやろう	小田実	河出書房新社
	ヨーロッパぶらりぶらり	山下清	文藝春秋新社
	ゴリラとピグミーの森	伊谷純一郎	岩波新書
	貧乏旅行世界一周	兼松保一	秋元書房
1962	アメリカ感情旅行	安岡章太郎	岩波新書
	太平洋ひとりぼっち	堀江謙一	文藝春秋新社
	女ひとり原始部落に入る　アフリカ・アメリカ体験記	桂ユキ子	光文社カッパブックス
	ボクの音楽武者修行	小澤征爾	音楽之友社
1963	アフリカ大陸	今西錦司編	筑摩書房
	カナダ・エスキモー	本多勝一	朝日新聞社
1964	黒人大学留学記	青柳清孝	中公新書
	加藤周一世界漫遊記	加藤周一	毎日新聞社
1965	南ヴェトナム戦争従軍記	岡村昭彦	岩波新書
	アメリカと私	江藤淳	朝日新聞社
	ヨーロッパ退屈日記	伊丹十三	文藝春秋新社
1966	天国にいちばん近い島	森村桂	学習研究社
	アデウスにっぽん	大槻洋志郎、本間久靖	本田書房
1967	三文役者のニッポン日記	殿山泰司	三一書房
	ヒッピー発見	城山三郎	毎日新聞社
1968	メキシコ旅情	佐竹昭美・他	朝日新聞社
1969	食生活を探検する	石毛直道	文藝春秋
	旅の空の下で	森有正	筑摩書房

発行年	タイトル	著者	出版社
1970	誰も書かなかったソ連	鈴木俊子	サンケイ新聞社出版局
1971	青春を山に賭けて	植村直己	毎日新聞社
	淋しいアメリカ人	桐島洋子	文藝春秋
	「街道を行く」シリーズ始まる	司馬遼太郎	週刊朝日、朝日新聞社
	おまえも来るか！中近東　１日１ドルの旅	まるこぽーろ旅行団	まるこぽーろ旅行団出版局
	シルクロードの旅	深田久弥	朝日新聞社
1972	タイ国の花ヨメさん	江口法子	白川書院
	インド放浪	藤原新也	朝日新聞社
	俺様の宝石さ	浮谷東次郎	筑摩書房
	イタリアからの手紙	塩野七生	新潮社
1973	私の朝鮮語小辞典　ソウル遊学記	長璋吉	北洋社
	曠野から　アフリカで考える	川田順造	筑摩書房
	極限の旅	賀曽利隆	山と渓谷社
1974	マーメイド三世	堀江謙一	朝日新聞社
	なんで英語やるの？	中津燎子	午夢館
	風浪の旅	檀一雄	山と渓谷社
1975	花のある遠景	西江雅之	せりか書房
	新西洋事情	深田祐介	北洋社
	サハラに死す　上温湯隆の一生	上温湯隆	時事通信社
	ソウル実感録	田中明	北洋社
	ジャポネとフランセ　パリ特派員の日仏比較観察論	倉田保雄	サイマル出版会
1976	私の渡世日記	高峰秀子	朝日新聞社
	黄昏のロンドンから	木村治美	PHP 研究所
	河童が覗いたヨーロッパ	妹尾河童	話の特集
1977	パリ　旅の雑学ノート	玉村豊男	ダイヤモンド社
	若き数学者のアメリカ	藤原正彦	新潮社
	自分をさがして旅に生きてます	吉田ルイ子	じゃこめてい出版
1978	サイゴンから来た妻と娘	近藤紘一	文藝春秋
	オーパ！	開高健	集英社
	ぼくのニューヨーク案内	植草甚一	晶文社
1979	香港　旅の雑学ノート	山口文憲	ダイヤモンド社
	ニューヨーク人間図鑑	宮本美智子	草思社
	ワルシャワ貧乏物語　ある外国ぐらし	工藤久代	鎌倉書房
1980	海のラクダ　木造帆船ダウ同乗記	門田修	中公新書
1981	十六歳のオリザの未だかつてためしのない勇気が到達した最後の点と、到達しえた極限とを明らかにして、上々の首尾にいたった世界一周自転車旅行の冒険をしるす本	平田オリザ	晩聲社
	ヒマラヤ・スルジェ館物語	平尾和雄	講談社
1982	日本版ユリシーズ物語	高木暢夫	PMC 出版
	アフリカ33景	伊藤正孝	朝日新聞社
1983	シベリア鉄道9400キロ	宮脇俊三	角川書店
	バハル　アフリカが流れる	野町和嘉	集英社
	中国・グラスルーツ	西倉一喜	めこん
	街道のブライアンまたはマジックバスの話	黒田礼二	筑摩書房
1984	ソウルの練習問題　異文化への透視ノート	関川夏央	情報センター出版局
	インドでわしも考えた	椎名誠	小学館

発行年	タイトル	著者	出版社
1984	63歳からのパリ大学留学	藤沢たかし	新潮社
	ナホトカ青春航路	五木寛之	PHP 研究所
1985	妻たちの海外駐在	ヒロコ・ムトー	文藝春秋
	マダム・商社	谷口恵津子	学生社
	ベルリン物語	橋口譲二	情報センター出版局
1986	深夜特急	沢木耕太郎	新潮社
	ゴーゴー・インド	蔵前仁一	凱風社
	インドを食べる　豊穣の国・啓示の国	浅野哲哉	立風書房
	英国貴族になった私	マークス寿子	草思社
	一九七〇年の漂泊	足立倫行	文藝春秋
1987	アメリカ恥かき一人旅	群ようこ	本の雑誌社
1988	ストロベリー・ロード	石川好	早川書房
	路上のアジアにセンチメンタルな食欲	前川健一	筑摩書房
	異国の窓から	宮本輝	光文社
	ふだん着のソウル案内	戸田郁子	晶文社
1989	熱帯の闇市	篠沢純太	太田出版
	ヒマラヤを釣る	根深誠	山と渓谷社
	フィリッピーナを愛した男たち	久田恵	文藝春秋
1990	タマネギ畑で涙して	山下惣一	農山漁村文化協会
	ヨーロッパの不思議な町	巌谷國士	筑摩書房
	ミラノ　霧の風景	須賀敦子	白水社
1991	トルコのもう一つの顔	小島剛一	中公新書
	ふだん着のイスタンブール案内	細川直子	晶文社
	イギリスはおいしい	林望	平凡社
	シゲさんの地球ほいほい見聞録	金井重	山と渓谷社
1992	深夜特急　第三便	沢木耕太郎	新潮社
	イタリア歩けば…	林丈二	廣済堂出版
1994	やがて哀しき外国語	村上春樹	講談社
	スイス四季暦　春／夏・秋／冬	松永尚三／絵・さかもとふさ	東京書籍
	二十年目のインドネシア	倉沢愛子	草思社
1995	アジアン・ジャパニーズ	小林紀晴	情報センター出版局
	バックパッカー・パラダイス　旅人楽園	さいとう夫婦	旅行人
	森の回廊　ビルマ辺境　民族解放区の一三〇〇日	吉田敏浩	日本放送協会
	何もなくて豊かな島　南海の小島カオハガンに暮らす	崎山克彦	新潮社
	都市の地中海　光と海のトポスを訪ねて	陣内秀信	NTT 出版
	ポルトガル便り　リスボンの窓から	植田麻美子	彩流社
1996	ハワイ紀行	池澤夏樹	新潮社
	アフリカを食べる	松本仁一	朝日新聞社
	猿岩石日記　ユーラシア大陸横断ヒッチハイク	猿岩石	角川文庫
	コリアン世界の旅	野村進	講談社
	エジプトがすきだから。	なかがわみどり／ムラマツエリコ	JTB 日本交通公社出版事業局
1997	バリ島駐在物語	小出康太郎	アクアプラン
	スペインひるね暮らし	中丸明	文藝春秋
1998	マンゴーが空から降ってくる　タイの田舎に暮らすということ	水野潮	めこん

発行年	タイトル	著者	出版社
1998	東方見便録「もの出す人々」から見たアジア考現学	斉藤政喜／ イラスト・内澤旬子	小学館
	無敵のソウル	まのとのま	スパイク
	北朝鮮に消えた友と私の物語	萩原遼	文藝春秋
1999	ダッカの55日	大嶽洋子／大嶽秀夫	中央公論新社
	イスタンブールのへそのゴマ	フジイ・セツコ	旅行人
2000	インド日記　牛とコンピュータの国から	小熊英二	新曜社